

中学校の教科指導におけるカリキュラム・マネジメント推進の方策 －「逆向き設計」による授業実践を通して－

学校力開発分野(17220914) 佐 竹 桂 一

カリキュラム・マネジメントは、学校、学年、学級等のさまざまなレベルで推進する必要がある。しかし、中学校の現状はその理解が浸透しているまでには至らず、教科担任制のもとでそれを推進する方策について模索している段階である。本研究では、中学校の教科指導の中でのカリキュラム・マネジメントの在り方を「逆向き設計」の視点から捉え直し、育成すべき資質・能力をベースとした指導計画と実践によって、中学校におけるカリキュラム・マネジメント推進の糸口とすることを目指す。

[キーワード] カリキュラム・マネジメント, 教科指導, 逆向き設計, パフォーマンス課題

1 問題の所在と方法

(1) 現状と課題

新学習指導要領では、カリキュラム・マネジメント(以後「C・M」と略す)がこれまで以上に重要であることが明示されたが、以下に示すとおり、未だ深く浸透するに至っていないと思われる。

2017年度「中学校全国学力学習状況調査」学校質問紙の集約から、C・Mに関する質問事項(28)～(31)について、選択肢を一部集約して、数値を集計し直した(表1)。これによると、教科横断の視点で学校教育目標の具現化を図っていくところと教育課程表を各教科等と関連づけて作成するところにおいて、特に本県の数値が全国平均と比べても低いことがわかる。この傾向は、本県A地区で2017年7月に行われた教務主任研修会でのC・M研修においても事前アンケートから顕著である¹⁾。参加した教務主任による自由記述からは、教科横断的な視点でのカリキュラムの組織的配列の仕方、

教科同士のつながりの方策、学年間の連携での年間計画の工夫の方法について悩みが深いことが窺えた。また、C・Mの概念自体の理解が不十分という声も見受けられ、「何から始めればよいか」という切実な思いも見取れた。さらに、教科担任レベルにおけるC・M推進の方策については、実践事例が多いとはいえない。小学校で運用されている、教科や総合の時間、学校行事等を網羅した年間カリキュラムの一覧表が中学校では一般化していないこともC・M推進を停滞させる一因と考えられる。筆者の経験によると、中学校では年間指導計画と評価規準は学年教科ごとに作成し運用されているが、その中身は学習内容に関する計画が主であり、他教科と連関が図られることはほとんどなかった。筆者が直接接した多くの中学校教員との情報交換からも、C・Mに対する関心は高いとは言えず、それぞれが推進上の悩みを抱えていると察せられる。

以上より、一人一人の教員が、教科担任として指導計画の改善を図り、年間カリキュラム一覧表によって、育むべき資質・能力の位置づけを明確にしていくことが本県中学校におけるC・M推進上の課題であるといえる。

(2) 研究の目的と方法

①研究の目的

以上のとおり、特にC・Mが推進できてない中学校の現状を踏まえて、本研究の目的を、教員一人一人の教科指導の中で「逆向き設計」による単元設計の視点から捉え直し、育成すべき資質・能力を核とした教科指導計画へと転換することで、中学校のC・M推進の糸口をつかむこととする。教科

表1 全国学力学習状況調査の質問回答結果(2017)から集計

番号	質問事項と選択肢	全国	本県
(28)	指導計画の作成に当たっては、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していますか 「している」・「どちらかといえばしている」の合計 「あまりしていない」・「全くしていない」の合計	78.3% 21.6%	65.0% 35.1%
(29)	教育課程表(全体計画や年間指導計画等)について、各教科等の教育目標や内容の相互関連が分かるように作成していますか 「している」・「どちらかといえばしている」の合計 「あまりしていない」・「全くしていない」の合計	77.5% 22.5%	60.8% 38.2%
(30)	生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか 「している」・「どちらかといえばしている」の合計 「あまりしていない」・「全くしていない」の合計	87.8% 12.2%	88.6% 11.3%
(31)	指導計画の作成に当たっては、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせていますか 「している」・「どちらかといえばしている」の合計 「あまりしていない」・「全くしていない」の合計	74.6% 25.4%	72.2% 27.9%

横断的な視点を取り入れるためにも、そのベースとして教員一人一人の教科指導の質的転換が成される必要があると考える。自らの教科のどの単元でどんな資質・能力をつけていくのかを検討することで、他教科とのつながりが見えるようになるからである。

②研究の方法

研究の方法として採り上げる「逆向き設計」は、1998 年アメリカのウィギンズとマクタイによって提唱されたカリキュラム設計論である。「逆向き」とは、学びの結果到達する子どもの姿を最初にイメージし、そのゴールに向かうためのプロセスをカリキュラム設計していくところからついた呼称である。日本には西岡(2008)によって紹介され、その基になった著作も翻訳された(ウィギンズ・マクタイ, 2012)。「逆向き設計」は、目標標準型評価の先行研究として知られてきたが、C・M 推進において有効な手段となることから再び注目されている。ウィギンズら(2012)は、これまでの伝統的なカリキュラム設計には2種類の無目的さが存在している(一つは活動あって学びなしといわれる活動思考の設計、二つ目は教科書で学びを進める網羅主義の設計)と批判し、これを「双子の過ち」と呼んで戒めている。「逆向き設計」は、こうした伝統的な設計と決別するために、3段階で設計のアプローチを行うところに特徴がある。それは、求められている結果を明確にし(第1段階)、その結果を見取るための承認できる証拠を決定し(第2段階)、どんな指導的活動が最も適切なのか、その学習経験と指導を計画する(第3段階)ことで学びが価値づけられるとしている。

そして「逆向き設計」の肝となるのが、パフォーマンス課題の設定とパフォーマンス評価の仕方、そのためのルーブリックの確立である。これらにより指導と評価の一体化が行われることから、単元設計時に評価まで見通すカリキュラムとなっているところがもう一つの特徴といえる。ウィギンズら(2012)は、パフォーマンス課題の有効性について、「リアルな文脈の中に設定された現実世界のゴールを提示するもの」として効果的であるとらえ、生徒は本物もしくはシミュレーション上の対象に対して具体的な完成作品や実演を作り出して、それを評価していくことの優越性について言及している。そしてそのパフォーマンスの課題と評価は事前に生徒に知らされていることが大切と説い

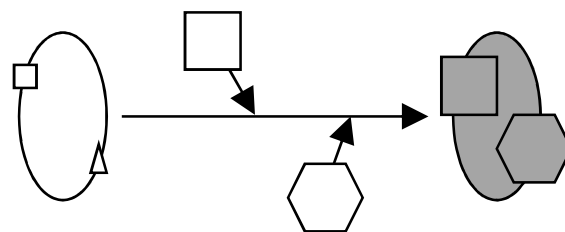


図1 単元における折衷型パフォーマンス課題 西岡(2008)

ている。さらに西岡(2008)は単元におけるパフォーマンス課題の位置づけを、パーツ組み立て型、繰り返し型、折衷型の3つに類型化しモデルを示している。本実践では折衷型のモデルを取り入れ(図1)、単元冒頭で単元を貫くパフォーマンス課題を提示し、最終時間の4時間目に成果を評価することを生徒に明示した。折衷型は、単元初めで示されたパフォーマンス課題を意識しながらその後の学習活動を行える型で今回の実践に最適と筆者は判断した。

2 実践と考察

(1) 実習校における実践の概要

パフォーマンス課題の設定はシナリオをつくることが重要となる。その作り方はウィギンズら(2012)が「GRASPS」として6つの視点²⁾を示した。その観点に則って本実践のパフォーマンス課題を以下のとおり作成した。

- ・(ゴール Goal と役割 Role): あなたは旅行会社の社員です。グループメンバーとプロジェクトを推進することになりました。
- ・(相手 Audience): アメリカ合衆国からの観光客を北海道へ誘うキャンペーンを開くプロジェクトです。
- ・(状況 Situation) どんなキャンペーンを打って、北海道の魅力をアメリカの人々に伝えたいでしょうか。
- ・(完成作品 Product と成功を評価するスタンダード Standards): グループメンバーと共に、アメリカの人々がどんなことを求めて日本に訪問しているかを分析し、そのニーズを確認したのち、北海道にアメリカ人を誘う方策を考え企画を提案しなさい。

これまで一般的だった課題と比べて、文章が長くなり、場面設定を重視していることがわかる。ウィギンズら(2012)は、このような場面設定こそが「生徒に現実世界における意義を感じさせるものとなる」としている。

単元指導計画の作成は、ウィギンズら(2012)による「逆向き設計」のテンプレートシートをもとに、3段階のプロセスを念頭に、育成すべき資質・能力との関連を図り、その使い勝手を考えて1枚

のシートに収まるよう作成した(図2)。第1段階の求められている結果では、学校教育目標や育成すべき資質・能力を示し、第2段階でパフォーマンス課題と評価を設定している。第3段階では、学習計画を大まかに示し、評価に至る流れを示している。

授業は4時間扱いの小単元で構成し、協同的な学び合いを基軸にしたグループ学習を展開した。時数については、他のクラスとの進捗の都合から結果的に現行教科書の標準時数で実施した。

(2) 考察

当初は完成品として白紙の状態から作られた企画書を期待したのであるが、4時間で到達できる生徒が予想以上に少ないことが見えたため、企画書として3つの案を提示し、それぞれの良さを検討して根拠を明確にして案を決定する、と変更した。この変更の理由として、指導計画に時数的な無理があったこと、生徒の実態把握が甘く最終成果物のレベルを高くしすぎたことがあげられる。筆者にとって大きな反省点であるが、ウィギンズら(2012)は、「診断的フィードバックと形成的フィードバックに基づく調整プロセスの歩みとして単元設計の調整は必要である」と肯定的にとらえている。つまり、計画の修正は、運用する過程でPDCAサイクルが機能した結果であると考えられ、生じ

た見通しのズレは次の単元において、調整が成されることが必要となってくる。今回の場合、修正された最終成果物は、単元最後の全体共有の場面で生徒に発表機会を広く促す結果となった。生徒は多様な考え方に触れ、授業の満足感が得られたという内容の振り返りが多く見られた。

「逆向き設計」によって生徒の学びはどのように変容したのか、その全体像を今回の小単元で見取することは至難であるが、次のようなエピソードが見て取れた。

エピソード1 男子C

Cは、最初から「難しい」という言葉を連発し、普段と違う課題の取り組み方に戸惑っていた。2時間目は統計資料からアメリカの人々が何を求めて日本に来るかを調べてヒントを掴んだようである。3時間目、調べた北海道のリソースをどうアピールすべきかを仲間と真剣に考えていた。4時間目、採用案の根拠とその理由づけを明確にして、企画書の良さを説明できていた。振り返りには「アメリカ人を誘えた」と自分なりの達成感を書いていた。

エピソード2 女子D

Dは、2時間目の農業の資料でクラーク博士の功績が故郷のアメリカではあまり知られていない事実をパフォーマンス課題に活かそうとした。クラーク博士の活躍をアメリカ人に伝えるという視点で最終パフォーマンスを考えていた。そのために必要とされる様々な地理的事象が知識として整理されていたことを4時間目の振り返りで記述していた。

この2つの事例からは、生徒が場面設定を空想的なものというよりもむしろ現実的なものとしてとらえる姿が伝わってくる。課題を現実世界における意義あるものとしてとらえたといえよう。

単元指導計画		第1段階…求められている結果	
		学校教育目標	教科のめざす姿（育むべき資質・能力）
2年 社会科（地理） 単元名 <u>北海道地方</u>		「優しさとたくましさをもつ生徒の育成」 ・豊かでしなやかな心 ・確かな学力 ・つなぐ力	・多面的・多角的に考察する力 ・社会形成に参画しようとする態度 ・まとめ、説明、論述する力
永続的理解（単元の目標） ・北海道の地理的特色を自然環境や歴史的背景を視点に考察し、説明できる。 ・北方領土の現状とそこまでに至る歴史的経緯を資料をもとに説明できる。 ・インパウンドの増加にどのように対応するか、北海道観光を窓口国際交流の方策について考える。		本質的な問い ・北海道の自然環境や地理的特色にどのようなものがあるか。 ・北海道はどのような歴史的背景で成り立っているか。	身に付けて欲しい知識・技能 ・独特の気候区分を形成する地形的特質 ・広大な土地の活用と保全の歴史（開拓の歴史と環境保全） ・インパウンドの増加と観光資源の活用

第2段階…評価のための証拠			
パフォーマンス課題「アメリカの人々を北海道に呼ぼう！」 あなたは旅行会社の社員です。グループメンバーとプロジェクトを推進することになりました。アメリカ合衆国からの観光客を北海道へ誘うキャンペーンを開くプロジェクトです。 どんなキャンペーンを打って、北海道の魅力をアメリカの人々に伝えたいのでしょうか。グループメンバーと共に、アメリカの人々がどんなことを求めて日本に訪問しているかを分析し、そのニーズを確認したのち、北海道にアメリカ人を誘う方策を考え企画を提案しなさい。		ルーブリック（評価指標） A…PREP法を用いて、歴史的背景を基盤として論理的にまとめ、プレゼン構想図に記述している。説得力が高い。 B…PREP法を用いて論理的にまとめ、プレゼン構想図に記述している。 C…プレゼン構想図の記述内容に論理性を欠き、内容も不明瞭。	
		評価規準 北海道の魅力をアメリカ人に伝えるために、地域の魅力的なリソースを歴史的背景を視点に調べ、仲間と協調して企画を提案することができる。	

第3段階…学習計画					
時数	学習活動	評価の観点			評価物
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学ぶ態度	
1	北海道の自然環境を確認し、統計資料からパフォーマンス課題をつかみ、必要となる地理的事象を調べる。	○		○	ワークシートへの記述 振り返り
2	北海道のもつ特色を稲作・酪農・民族・漁業・工業の分野から抽出し、思考ツールを用いて企画のアイデアを考える。	○		○	ワークシートへの記述 ペン図 振り返り
3	アメリカ人から見て、魅力的に見える北海道の地理的資源を歴史的背景をもとに結びつけ、旅行の企画内容を検討する。		○	○	対話 振り返り ワークシート
4	単元のパフォーマンス課題にそって、企画の提案を行い、多様な考え方に触れる。		○	○	対話 発表 プレゼン構想図

図2 「逆向き設計」の3段階を採り入れた単元指導計画例(実習校において筆者作成)

3 到達点と課題

(1) 到達点

本研究では、「逆向き設計」による単元設計を窓口に、パフォーマンス課題が生徒の学びにどんな変化をもたらし、C・Mの推進に寄与するかを検討してきた。現状は、筆者自身の手による実践と省察をもとにした不十分なものといわざるを得ない。しかし、その中から小単元では、生徒の実態把握を確実にしていかなないと、求められている結果と現実とのズレが生じ、その修正が図られる必然が出てくることがわかった。つまり「逆向き設計」は、計画段階と実践段階で生じた実態のズレを見取り易く、指導計画の調整や修正を容易にする効果があるということである。そして、その修正を図ることが、C・Mを教科の中で意識するきっかけとなるといえる。さらに、教科指導の中でPDCAサイクルを回すことにもつながってくる。そのためには、パフォーマンス課題の作成に精通し、評価と一体となった指導計画を標準化していくことがC・M推進上不可欠となってくるといえよう。

また、4時間のそれぞれの授業を参観した教員からは「課題の設定の仕方がとても新鮮だった」、「生徒の学習活動への向き合い方が良かった」と好意的な意見があった。さらに、「パフォーマンスの対象ターゲットをもっと絞り込んだリアルな対象にした方が生徒の思考を促したのでは」、「修正前のパフォーマンスが可能だったのでは」と他教科から課題設定に対して踏み込んだ反応もあった。これは「逆向き設計」が教科の枠を越えた教員間の意見交流を活発にし、学びの教員集団づくりの一助となることを示唆している。

(2) 課題

課題は、年間カリキュラムにおける単元の位置づけを明確にし、時数の確保や単元の軽重をつける工夫が必要ということである。筆者自身、これまでの年間指導計画作成において、育成すべき資質・能力を核とする「逆向き設計」ひいてはC・Mの意識を高く持ってこなかったと振り返ることができる。これまでは、各単元の学習量を平準化して網羅的な授業を展開してきた。しかし育成すべき資質・能力を核とする「逆向き設計」によれば、どの単元で時間をかけるか、その軽重を年間指導計画の中でどう位置づけるかについて、教科担任の裁量が問われる。年間を通したカリキュラム設計がこれまで以上に重要となり、ひいてはこのこ

とが教科担任のC・M力の向上に繋がると考える。すなわち、必然的に教科を横断する視点も意識されることになる。「逆向き設計」によるカリキュラムの開発は、C・M推進にとって大きな助けになってくれると期待される。

注

- 1) 2017 年、中学校の教務主任研修会での C・M 研修において講師を務めた山形大学大学院山内隆之准教授より提供いただいたアンケート調査結果による。
- 2) GRASPS の 6 つの視点とは、ゴール(Goal)、役割(Role)、相手(Audience)、状況(Situation)、パフォーマンス(Performance)、スタンダード(Standard)で、パフォーマンス課題の文脈に 6 つの要素を入れ込むことを提唱している。

引用文献

- G. ウィギンズ・J. マクタイ著 西岡加名恵(訳 2012)『理解をもたらすカリキュラム設計-「逆向き設計」の理論と方法』, 日本標準 p24, pp. 26-27, p190.
- 国立教育政策研究所(2017)「全国学力・学習状況調査調査結果資料質問紙調査の結果」
<http://www.nier.go.jp/17chousakekkahoukoku/factsheet/17middle/>(最終閲覧日 2017 年 12 月 27 日)
- 西岡加名恵(2008)『「逆向き設計」とは何か』西岡加名恵編『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』, 明治図書, p12.

参考文献

- 松尾知明(2016)『未来を拓く資質。能力と新しい教育課程-求められる学びのカリキュラム・マネジメント-』, 学事出版.
- 田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵(編著)(2016)『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』, ぎょうせい.

A Method of Curriculum Management Promotion in Subjects of Junior High School: Action Research Through Putting "Backward Design" into Each Lesson
Keiichi SATAKE